



No. 111

September 1995

# 甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

## *Astenus setifer* CAMERON という名のハネカクシ

柴田 泰利

1983年野生研（現自然環境研究センター）の斉藤秀生氏から千葉県浦安市で採集された奇妙な形をしたハネカクシを2頭いただいた。体長は4mm弱と小さく全体がずんぐりとして平行、大きな頭部に小さな複眼、それに体にくらべて細く短い触角や脚、体側面にある長い剛毛など、一見してアリガタハネカクシ亜科ということはわかったが、属がわからない。こんな種が日本にもいるのということが私の第一印象であった。

早速、手持ちの文献で調べてみた。外見が *Acanthoglossa* 属に良く似ている（日本からは *A. hirtella* (SHARP) が知られている）のでこの属から開始したのだが付節や口器の構造などが違う。そこで近縁と思われるいくつかの属にも当たってみたのだがその所属を確定するまでには至らなかった。この段階ではこの種が *Astenus* 属のものであるとは全く思ってもみなかった。さらに、1985年になって和泉敦夫氏から同定を頼まれた標本中に東京都大田区の大井埠頭で採集された1頭を発見した。その後この種のことは気にはなっていたのだが、それ以上の調べは中止してしまった。

1989年の夏、大英博物館（自然史）を訪問する機会があり日本や台湾産のハネカクシのタイプ標本を調べていたところ、思いもかけず *Astenus* 属の標本中に本種と同じものを発見することが出来た。そこには *Astenus setifer* CAMERON というラベルがついていた。帰国後、CAMERON の原記載とタイプに関するメモをもとに標本を検討した結果まちがいにこの種であることが判明した。CAMERON の原記載中には *A. setifer* はその外形が外国産の *A. curtulus* ERICHSON に非常に良く似るとあり、この *A. curtulus* は日本産の他の種とは異なる *Eurysunius* 亜属の

ものだったのである。

そこで、原記載以後長い間その正体が不明であった本種の簡単な紹介をし諸兄の参考に供する次第である。

### *Astenus (Eurysunius) setifer* CAMERON

*Astenus setifer* CAMERON, 1930, Ent. mon. Mag., 66: 206. (type locality: Kobe).

体全体は頑強でやや膨隆するが頭部を除き上面は扁平。多少とも光沢があり、頭部と胸部は暗黒褐色、上翅は赤褐色、腹部は黒色だが各節の後縁はすこし黄色味を帯びる。触角、口器、脚は黄赤色。体側面はやや長い黒色の剛毛があるが、とくに胸部、上翅のものが顕著である。体長：3.5~4 mm。

頭部はほぼ台形で胸部と同幅、後方に向かって広がるが後縁角は丸い。後縁は中央部ですこし内側に曲がる。表面は前方から後方約1/3のところまでゆるやかに膨隆するが、そこから後縁に向かって明らかに落ち込む、中央に短黄毛を具えた中凹みのへそ状点刻を密布し、点刻間には網状印刻がある。複眼は極めて小さく、その長径は複眼後方の側頭部の半分長さしかなく、側方にはほとんど突出しない。触角は比較的短く、後方に伸ばすとほぼ前背板中央までの長さに等しい。3節は2節よりすこし長く、5~10節は各々わずかに幅より長く、末端に向かって強く広がる、末端節は10節と同幅だが前節の2.5倍の長さがある。

胸部は横広で側面はほとんど真っすぐで平行、それぞれ3本の黒色剛毛を具え、後縁角は前縁角にくらべてより鈍い。表面には小顆粒を密布するが、その小顆粒は中央に短黄毛をもつ小点刻からなる。

上翅は横広で前背板よりもわずかに幅が広く、側面にはそれぞれ7~8本の黒色剛毛がある。表面は

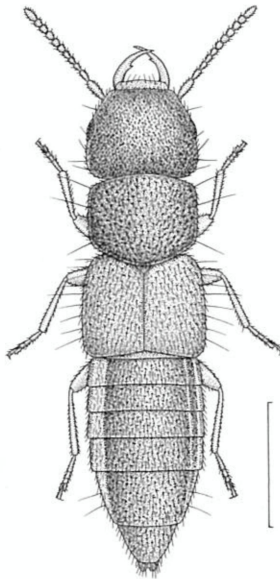


図1. *Astenus (Eurysunius) setifer* CAMERON, ♀, 千葉県浦安産。スケール 1.0 mm.



図2. *Astenus setifer* CAMERON: Holotype (♀)と添付ラベル, 大英博物館(自然史)蔵.

前背板と同様な構造の小顆粒状の点刻を密布する。

腹部は上翅より少し幅が狭く, 5節が最も幅広。基部近くの節は粗い小点刻をやや密に装うが先端の節になるにしたがって点刻はより細かくなり, 表面の細毛もより長くなる。

検視標本. 1♀, 兵庫県神戸市篠原, 23. VI. 1924, J. E. A. LEWIS 採集。(タイプ標本, 大英博物館(自然史)蔵); 2♀♀, 千葉県浦安市浦安中央公園, 21. IV. 1980, 齊藤秀生採集; 1♀, 東京都大田区大井埠頭, 24. VI. 1984, 和泉敦夫採集。

備考. 残念ながら検視標本のすべてが雌個体であったため雄交尾器を図示することが出来なかった。*Astenus* 属には5亜属が発表されているが, いままで日本ではほとんど使われていない。*A. setifer*

は *Eurysunius* 亜属に入る。この亜属の特徴は体全体に厚みがあるが上面は扁平で脚や触角は短く, さらに前背板, 上翅, 腹部はほぼ同幅である。これらの点から他の亜属のものとは際立って異なる特徴を持っている。日本には12種が記録されているが, 本種を除きすべての種が, 体は細長くすりとした外形で脚や触角も長く別亜属に入る。

現在までにこの亜属には約40種がモロッコ, アルジェリア, カナリア諸島などのアフリカ北部, スペイン, ポルトガルなどのイベリア半島, サルジニア島, コルシカ島, シチリア島, イタリア, ユーゴスラビア, ギリシャ, レバノンなどから知られているが, その分布の中心は地中海周辺の地域である。ただ1種 *Astenus (Eurysunius) paradoxus* EPPEL-

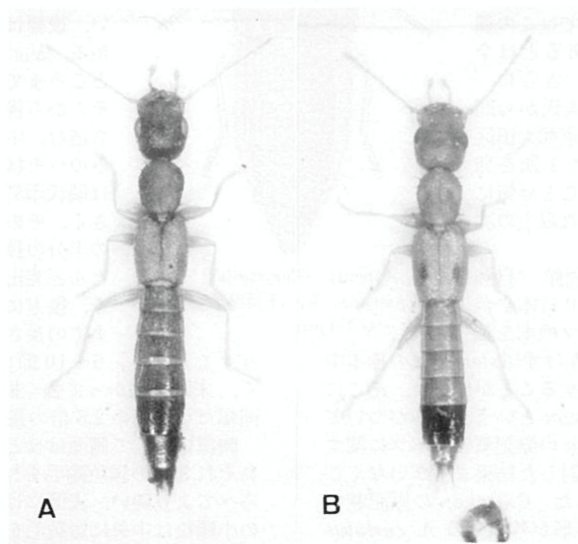


図3. 日本産 *Astenus* 属の2種. オオシリグロハネクシ *Astenus suffusus* (SHARP) (A); フタホシシリグロハネカクシ *Astenus bicolor* (SHARP) (B). タイプ標本, 大英博物館(自然史)蔵.

SHEIM だけがコーカサスに分布している。そして途中の地域をとびこして遠く離れた日本にこの *Eurysunius* 亜属の *A. setifer* が分布していることは大変興味深い。

本種はコルシカやサルジニア島に分布する *Astenus (Eurysunius) curtulus* ERICHSON に外見が似るが、*A. setifer* のほうがより光沢があり、前背板後方には陥没がなく、上翅はより長く体側面に顕著な剛毛をもつことなどにより識別は容易である。

日本産 12 種のうち和名のついているのは、(フタホシ) シリグロ、(ヒメ) シリグロ、(ヤマト) シリグロ、(オオ) シリグロそれに (キアシクロ) クビボソの 5 種である。4 種が ○○ シリグロ、1 種が ○○ クビボソである。和名なので属共通を示す語尾を必ずしもつける必要はないが、和名のない種のなかには腹部全部が一色のものもあり ○○ シリグロで通すのにはやや無理がある。さらに、○○ クビボソの方は近縁の *Rugilus* 属にもあり、混乱をさける意味もあり今回はあえて和名をつけることはしなかった。

浦安公園で採集された 2 個体は斉藤秀生氏によ

れば公園内の掃き寄せられた落葉下、一方、和泉敦夫氏の採られた大井埠頭での個体は側溝内に堆積した落葉下からそれぞれ発見されている。ただ、残念なことに大井での採集場所はその後、東京卸売市場として開発されてしまったとのことである。この *Eurysunius* 亜属の分布からみて、日本でも今後海岸近くの平野部を中心に追加の個体が発見される可能性は大きい。

末筆ながら常日頃ご指導ご鞭撻を賜る渡辺泰明氏、貴重な標本をご恵与下さった斉藤秀生、和泉敦夫の諸氏並びに全形図を用意して下さいました吉谷昭憲氏に厚くお礼申し上げる。

#### 参考文献

- CAMERON, M., 1930. New species of Staphylinidae from Japan. *Ent. mon. Mag.*, 66: 205-208.  
 COIFFAIT, H., 1984. Coléoptères Staphylinides de la Région Paléarctique Occidentale V. *Nouv. Rev. Ent., Suppl.*, 13(4): 1-424.

(東京都町田市)

### 「日本未記録のジョウカイボン 2 種」の訂正について

高橋 和 弘

筆者は、甲虫ニュース第 108 号において、ジョウカイボン科の 2 種を日本未記録種として報告した(高橋, 1994) が、その所属や種名の取扱いならびに記述内容について誤りがあったのでここに訂正したい。

なお、文献の存在を御教示いただいた中根猛彦博士、記載内容について御指摘をいただいた今坂正一氏ならびに文献等でお世話になった佐藤正孝博士に厚くお礼申し上げます。  
 属の扱いについて

KASANTSEV (1992) は、交尾器の形質の中で median hook (laterophyses) の有無により、従来の *Podabrus* 属を *Podabrus* と *Dichelotarsus* の 2 属に分離し、*Podabrus* の亜属であった *Asiopodabrus* を *Dichelotarsus* の亜属として扱った。確かに交尾器の構造から考えると、前報で報告した 2 種を *Podabrus* 亜属に含めるには問題があり、*Dichelotarsus* として処理するのは妥当であろうと考えられる。しかし、この *Dichelotarsus* が日本産の種が多数所属する *Asiopodabrus* と同属で、*Podabrus* とは別の属であるという考えには納得しがたいものがある。その 1 つの根拠としては、*Asiopodabrus* の中には *P. (A.) inexpectus* TAKAHASHI や *P. (A.) kadowakii* NAKANE et MAKINO のように例外的ではあるが median hook ないしそれに相当する器官をもつ種が知られており、median hook の有無が属を分ける絶対的な区別点とはならないと考えられるからである。さらに、全体の体型、爪の形の特徴を考慮に入れると、*Dichelotarsus* は *Asiopodabrus*

よりもむしろ *Podabrus* 基亜属により近いような印象をうける。いずれにせよこの 3 つのグループは、互いに独立した種群と考えられ、もしこの 3 群を区別するのであれば、それぞれ別属として処理するか、同一属の亜属として扱うのが妥当と思われる。そこで、ここではとりあえず *Podabrus* 属を広く解釈し、*Dichelotarsus* をその亜属として扱うこととした。

タカネクロクビボソジョウカイ *Podabrus (Dichelotarsus) angusticollis* (MOTSCHULSKY, 1860)

本種の記載の中で、♂の前肢の爪の形が、左右で異なると記載したが、図 1 に示したように若干の形態の違いは認められるものの、左右とも 2 裂状とするのが正しいと思われるのでここに訂正したい。本種に関しては、十分な個体数を検することができなかったため明確にはいえないが、♂の前肢の爪の形に関しては、基本的には 2 裂状であるが、個体によって程度の差はあるものの基部がやや膨れる個体もあるようである。したがって、前肢の爪の形によれば、本種は、この亜属の本来の特徴である爪の基部が三角形に膨れるという形態から、2 裂状へと変化した特異な種ということになる。KASANTSEV (1992) にも本亜属の爪の形の違いが図示されており、これによれば *P. lapponicus* は、爪の基部がふくれる型であるが、本種は完全な 2 裂状であり、*P. flavimanus* は両者の中間型の形態であることが示されている。このことは交尾器の形態をあわせて考えると、本種は、この亜属の中でもかなり特化した種であることを示していると思われる。



図 1. *P. (D.) angusticollis* 雄の前肢の爪 (内側).  
左: 左前肢; 右: 右前肢.

なお、本種の爪の形の配列は、既知種の中ではニセミヤマクビボソジョウカイ *P. pseudolictorius* TAKAHASHI, 1992 と全く同じということになる。この種は、爪の形や交尾器の形状が特異で、*Asiopodabrus* とは異なるグループに属するのではないかと考えられている種であるが、本種との間には体型や交尾器の構造にかなりの相違があり、とても同一グループとは認められない。これらの点から、爪の形の相違は、各グループの中で並行的に起こりうる変異であり、亜属等を区分する上での絶対的な形質ではないことがここでも明らかとなったが、*Podabrus* 属グループの類縁関係を再検討するうえで十分

#### ○カギモンケシナガクチキの釧路海岸の記録

カギモンケシナガクチキ *Abdera scriptipennis* LEWIS は、北海道蕁菜沼産の 1 頭に基づいて記載された種であるが、その後 100 年にわたって道内からの追加記録はない (豊嶋ほか, 1991)。本州においても長野、山梨、岐阜、富山、千葉の各県からわずかの個体が採集されているにすぎない (水野, 1994)。筆者は本種を釧路支庁で採集しているので記録しておきたい。

1 頭、北海道厚岸郡厚岸町菅蒲が原, 24. VI. 1989. 筆者採集・保管。

採集地点は太平洋に面した標高約 80 m の台地のうえで、カツラ、ミズナラを混じえたトドマツ・ダケカバ林が防霧保安林として保存されている。ダケカバの胸高直径は最大 80 cm 程度あり、原生林に近い環境である。上記の個体は地上から 1 m 程度の位置にあったダケカバの枯枝を叩いて得たが、黒く湿って菌類もついておらず、叩くと土状の木くずが落ちるような、余り「食指の動かない」枯枝であった。



に考慮すべき問題であろうと思われる。

#### エゾクロクビボソジョウカイ *Podabrus (Dichelotarsus) lapponicus* (GYLLENHAL, 1810)

GYLLENHAL, 1810, *Ins Suec.* I, 2, Addenda: 15.

本種については、*P. flavimanus* (MOTSCHULSKY) として報告したが、KASANTSEV (1992) によれば、むしろ *P. lapponicus* (GYLLENHAL) を当てはめるのが適当のようである。この両種の交尾器は、きわめてよく似ているため同定は慎重に行う必要がある。なお、*P. flavimanus* についても、千島列島が分布地として記録されているため北海道にも分布している可能性が高く、今後の詳しい調査が待たれるところである。

#### 引用文献

- KASANTSEV, S., 1992. Contribution to the knowledge of Palaearctic Canthalidae (Coleoptera). Notes on *Dichelotarsus* MOTSCHULSKY. *Ent. Basil.*, 15: 267-288.  
高橋和弘, 1994. 日本未記録のジョウカイボン 2 種. 甲虫ニュース, (108): 1-2.

(神奈川県平塚市)

末筆ながら、文献の入手に便宜を図って下さった水野弘造氏に厚くお礼申しあげる。

#### 引用文献

- 豊嶋亮司・石川 豊・水野弘造, 1991. 北海道のナガクチキムシ(上). 月刊むし, (243): 27-31.  
水野弘造, 1994. ナガクチキムシ漫談(8). 北九州の昆蟲, 41(1): 25-36.

(新潟県南魚沼郡, 芳賀 馨)

#### ○シンボリヒゲナガジョウカイを山梨県で採集

シンボリヒゲナガジョウカイ *Micropodabrus shinborii* TAKAHASHI は、神奈川県西丹沢から記載された種である。筆者はこれを山梨県の南アルプス山系で採集することができたので、記録しておきたい。

1♂, 山梨県早川町七面山, 23. IV. 1994; 4♂♂, 同所, 22. IV. 1995; 2♂♂, 山梨県韭崎市円野町, 29. IV. 1995.

いずれも谷底のカエデの花から得た。

一方日本には、本種の近似種ホソナガジョウカイ *Micropodabrus longipes* (WITTMER) が、伊豆、箱根、紀伊半島から記録されている。両種の分布状況に今後興味が持たれる。両種は外観が極めてよく似ており、♂交尾器の特に ventral process の形状により区別できる。

#### 参考文献

- 今坂正一, 1992. ホソナガジョウカイについて. 甲虫ニュース, (100): 27-30.  
高橋和弘, 1992. 神奈川県ジョウカイボン科. 神奈川県報, (100): 71-124.

(山梨県韭崎市, 雑倉正人)

コメツキムシ類の触角腔周辺の微細孔について

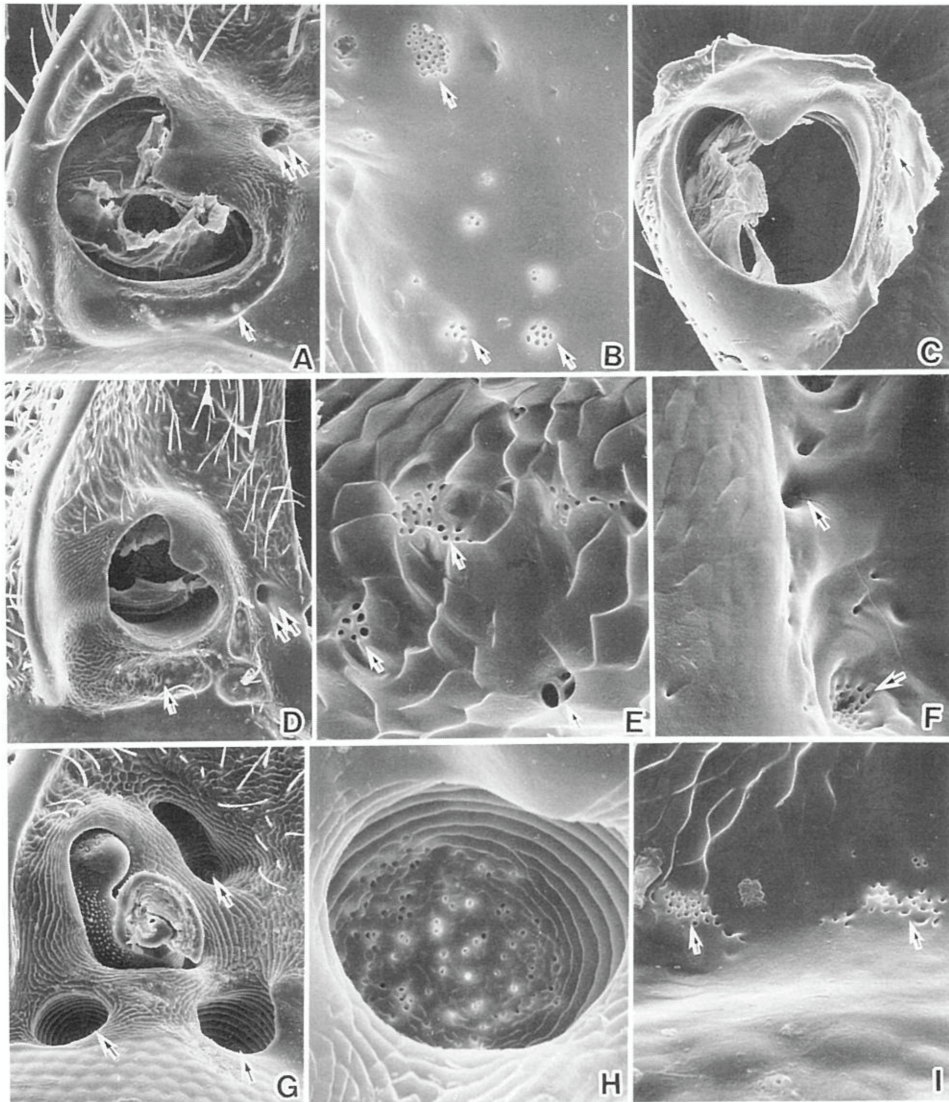
大平仁夫・松村 雄

臭いなどの情報を感知する器官は、一般に触角にあると云われている。コメツキムシ類においても同じで、触角の各節にそれを感知すると思われる器官が多数の小孔として認められることは、すでに大平(1978a, 1978c)などに報告したとおりである。しかし、触角以外の場所にも微細孔が存在することはあまり知られていない。筆者らは触角腔の周辺部に多

くの微細孔が存在するのを見いだしたのでここに報告する。

触角腔周辺部の微細孔

コメツキムシ類の触角は、上唇(labrum)と前頭横隆線(clypeal margin)に挟まれた隙間(fronto-clypeal area または nasal area)と呼ばれる複眼寄りのところから生じている。一般の昆虫類では頭盾



Figs. A-I. A, B, オオツヤハダコメツキ (*Stenagostus umbratilis*); C, ヒゲコメツキ (*Pectocera fortunei*); D, E, オオハナコメツキ (*Platynychus nothus*); F, ダイミョウコメツキ (*Anostirus daimio*); G, H, クチブトコメツキ (*Parasilesis musculus*); I, アオツヤハダコメツキ (*Mucromorphus miwai yushiroi*).

(clypeus) は明瞭な板として存在するが、コメツキムシ類では頭盾は板としては存在しなく、この上唇と前頭横隆線の隙間がそれに相当する部分であると考えられている。

触角腔の周辺部は扁平状になっているが、通常は複眼寄りのところは触角腔に沿って境界のはっきりしない浅い凹溝が存在する (Fig. A, D の↑印)。この凹溝を詳しく調べると、そこには個々にまた小集団からなる微細な孔が見いだされる。これは知覚孔か表皮面への分泌孔であると考えられる。

筆者らが検した種の中で、顕著に見いだされたのはオオツヤハダコメツキ (*Stenagostus umbratilis*) で、Fig. A の↑印をさらに拡大したのが Fig. B で、↑印で示したような単一から 20 個内外の微細孔が点々と分布しているのが確認できる。Fig. A の↑印のところの凹溝内のやや白くみえる場所に微細孔が開口している。また、オオハナコメツキ (*Platynychus nothus*) にも似たような微細孔群が存在しており、Fig. D の↑印の凹溝部を拡大したのが Fig. E である。

上記のような微細孔の集まりではないが、複眼が大形で、複眼と触角腔との間隔が狭まっているヒゲコメツキ (*Pectocera fortunei*) では、やや大形の単一微細孔が触角腔に沿って列状に存在している (Fig. C の↑印)。また、ダイミョウコメツキ (*Anostirus daimio*) ではやや大形の単一孔と微細孔の小集団が不規則に散在している (Fig. F の↑印)。その他、アオツヤハダコメツキ (*Mucromorphus miwai yushiroi*) では、触角腔外側の凹溝は不明瞭であるが、そこにはやはり Fig. I に示したような微細孔の小集団が散在している。

触角腔の周辺部で小孔が最も顕著に現れているのは、クチプトコメツキ属 (*Parasilesis*) やクチボソコメツキ属 (*Glyphonyx*) などに属する種である。それは Fig. G に示したように、触角腔の外側に円形状の 2 個と内側に 1 個 (種によって 2 個のものもある) 存在する。Fig. G の内側のは開口部は 1 孔であるが、内方部では 2 孔状に分枝している。これらの孔の底には Fig. H に見られるように微細な孔が多数確認できる。

その他、大部分の種では、触角下側の上唇寄りの所にやや目立つ単一の孔が認められる (Fig. A, D の↑印)。この孔はやや大形で多くの属の種でほぼ一定の位置に存在することから、他の場所の不定位置に開口する微細孔とは異なる機能を有する器官 (例えば一種の聴覚器官) ではないかと考えられる。

触角の各節に分布する知覚孔と触角腔周辺部に分

布する微細孔との機能が同じであるかどうかについては、形態面だけから判断することはできないが、触角腔周辺部に集中的に存在することは、単なる分泌孔だけではなく、他の役割を持った器官も存在することは間違いないものと思われる。このように、触角と異なる場所にさまざまな機能を有する器官が存在することは、大変興味あることであり、筆者らが知る範囲では本科の種について具体的に示したのはこれが最初ではないかと思われる。

成虫の触角腔の周辺部は、通常は花粉や微細な塵などが付着していて、観察にはよく洗浄してこれらの汚れを除かないと確認できないことが多い。筆者らは日本産の主要な属の代表種については調査しており、近似種また近属間では微細孔の形態や分布についても類似性が認められているので、今後さらに多くの種についても調べて行きたいと考えている。

このような器官の存在が、コメツキムシ類や他の昆虫類の生理機能の解明にも役立てば幸いである。なお、この研究は、筆者の一人である大平が 1994 年 9 月に、農林水産省農業技術研究所昆虫研究室に流動研究員として滞在し、室長の松村と共同研究に従事した研究の一部である。

**Abstract** Hitoo ÔHIRA and Takeshi MATSUMURA: Notes on the minute pores distributing around the antennal insertions of the elaterid-beetles.

By the observation of SEM, we confirmed the presence of different types of minute pores which distribute around the antennal insertions in some elaterid species. SEM-images were shown in the following figures; A and B (enlarged), *Stenagostus umbratilis*; C, *Pectocera fortunei*; D and E (enlarged), *Platynychus nothus*; F, *Anostirus daimio*; G and H (enlarged), *Parasilesis musculus musculus*; I, *Mucromorphus miwai yushiroi*.

## 引用文献

- 大平仁夫, 1987a. *Ascoliocerus* 属のコメツキムシ: 触角の知覚孔について. 甲虫ニュース, (75/76): 10.  
 ——— 1987b. コメツキムシ雑記 (XXIII). 昆虫と自然, 22(5): 10-11.  
 ——— 1987c. *Dalopius* 属の触角の知覚孔について. 昆虫と自然, 22(14): 29-30.  
 (大平仁夫: 愛知県岡崎市; 松村 雄: 茨城県つくば市)

## ○メダカオオキバハネカクシ北海道からの記録

*Megalopinus* 属はこれまで日本から 3 種が知られており、そのうちの 1 種メダカオオキバハネカクシ *M. japonicus* (NAKANE, 1957) は、これまでに本州、四国、九州、対馬、屋久島、琉球より記録されているが (NAOMI, 1986, *Kontyû*, 54(2): 344-352),

採集記録は少なく比較的まれな種とされている。昨年、筆者は従来記録のなかった北海道において、本種を採集しているので記録しておく。

1 頭、北海道札幌市円山, 22. VI. 1994. 筆者採集。菌類の発生した倒木上より得られた。

*Megalopinus* 属は主に熱帯、亜熱帯に分布してい

る属で、本種の北海道からの発見は生物地理学上興味深いものである。(東京農業大学、岸本年郎)

#### ○アカウキクサゾウムシが北海道にもいた

近年日本での存在が明らかになったアカウキクサゾウムシ *Stenopelmus rufinusus* GYLLENHAL, 1836 は、体長 2 mm 前後と小さいながら独特なゾウムシである。これまで関東地方の 2 カ所で見つかったが、今回さらに北海道でも採集されていたことがわかった。

1♂、北海道紋別市オムサロ原生花園、1993 年 9 月 4 日、佐藤光一氏採集。

佐藤光一氏のお話によると、海岸沿いの沼に流れこむ細い水路でゲンゴロウ採集のさいにネットに入ったそうである。

そもそも本種は北米南部の原産で、牧草などの干草に成虫が入って運ばれたらしく 19 世紀末にヨーロッパに侵入した。日本では 1987 年 7 月に初めて茨城県牛久市牛久沼でアカウキクサ属の 1 種から 3 頭が採集された。

アカウキクサ属はシダ科の小型の水生植物で世界に 6 種あるうち 2 種が日本に分布している。アカウキクサが静岡県以西の暖帯から熱帯(アフリカ)に、また日本特産のオオアカウキクサが九州以北に、アカウキクサよりも北方に分布する。茨城県のはオオアカウキクサだろうと思われる。

ついで 1992 年に神奈川県横浜市栄区の谷戸地場の場所ですら 1 頭が、翌 93 年には同じ場所のオオアカウキクサに局地的に多産しているのが見つかった。この発生地では 3 月初めに出現し 5 月から 6 月にかけて最も多く 6 月中旬をすぎると姿がみられなくなることで、私の採集した 231 頭でみると体上面の 3 色の色斑が迷彩のようにいくつものボタンに変異するめずらしい種であること、小数が成虫越冬するらしいこと、などがわかっている。

北海道のオホーツク海沿岸部で見つかったのは驚きだが、関東地方とは離れすぎていてその間がまったく不明である。本州から分散した有名な侵入種のイネミズゾウムシの場合と対比・類推することも今のところ不可能だが(イネミズゾウムシの侵入はカリフォルニアから輸入した干草に疑いがあるといわれているが本種もそうだろうか)、いずれにせよ今後の発見と解明のなりゆきがスリリングなアカウキクサゾウムシである。

今回貴重な標本を検査する機会を与えられた佐藤光一氏に深謝する。

#### 引用文献

- 森本 桂, 1986. ゾウムシ類—世界各地への侵入者. 日本の昆虫—侵略と攪乱の生態学, 133-139.  
 ————1988. 日本に侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農業研究, (137): 39.  
 渡 弘, 1994. アカウキクサゾウムシの新産地. 本誌, (106): 8.

(神奈川県横浜市, 堀川正美)

日本甲虫学会 会長 大倉正文氏  
(1915~1995) の急逝

林 匡 夫

つい先年大倉氏の喜寿記念号を編集発行し、同氏の人となりや業績、学会への貢献について述べた一文を草し、同氏への深い感謝の気持ちを表明し、今後益々の御健康と御活躍を祈念したばかりであった。その後も健康を保ち、時には採集にも出かけられ、毎年末の大会及びその後の懇親会にも御元気な姿を見せておられた。私は内々今年で 80 才になられるのを機会に、幹事会にはかり記念号の発行を企画してはと考えていた。

所が今年 1 月 17 日阪神・淡路地区にわたる未曾有の大地震が発生し、被災地は東北に伸び大阪北郊、地層の弱い大阪市西部に及び在住の多くの住民に多大の被害を与え、本会会員にも多くの被災者が出た。私も自宅が大きく激しくゆれたが、幸い大した被害もなかったので、電話で心当りの人々の安否の確認を始めたが、仲々状況を把握することが出来ず、やっと数日たって大倉氏と連絡がつき、御家族全員の安全とお宅が少し傷んだが無事とお話でほっとしたが、実情はそうでもなかった様であった。しかし氏はその後の幹事会にも出席し、50 巻 1 号の編集発行に最後迄努力され完成、その発送を目前に、8 月 21 日夜突然の病変で急逝された。

私は 50 巻 2 号を発行して引退したいとかねがね云われていた大倉氏の心身の健康を今回の大震災が大きく障害となって縮めたものと信じて深い哀悼の意を表するものである。

大倉氏は三重県久居市の出身、父君が旧制中学教諭の関係で幼少期に各地を移り変られた由であるが小学校入学以降、現大阪市天王寺区真法院町に居住、府立高津中学を経て関西学院高等商業学校を昭和 14 年に卒業、すぐ実業界に入られた。中学卒業後当時大阪で野外の昆虫採集を指導されていた虫のおじさん事、中林馮次氏の阪急沿線の箕面其他の採集会に加わり昆虫採集を始められた。12 年には伯耆大山、13 年には高野山から荒神岳・野迫川村・洞川等と採集範囲を広げて行かれた。

当時大阪周辺では寺西 暢・戸澤信義・岩田正俊、京都の竹内吉蔵・松田良弘の諸氏によって関西昆虫学会が組織され、会報を昭和 5 年発刊、8 年関西昆虫雑誌が創刊され、その第 1 巻に戸澤信義氏により「歩行虫の知識」が掲載され、これが関西の昆虫採集家達にオサムシ・ゴミムシブームをまき起した原因となった。

寺西 暢氏の肝入りで近くの大阪市立城北公園内に昆虫館が誕生、そこに「植物と昆虫の会」

が発足、その月例会に河野 洋・故伊賀正汎・故後藤光男外の多くの友人を獲得した大倉氏は、昆虫の指導者としての中林氏と同会名誉会員であられた戸澤信義氏との交流を深められゴミムシへの指向を固められたと云う。

北野中学の後輩として戸澤氏の指導を受けていた私も親交を深め、戦争末期甲虫同好者の集まりを持ったが、終戦後それを発展させて近畿甲虫同好会を発足させる迄となった。21年後藤氏の好意で大倉氏は宝塚、次いで現住所である御影に宅地を24年に求め25年1月住宅も完成、現在に至っている。私と大林一夫氏で造った虫の友の会の「昆虫学探論」と「近畿甲虫同好会々報」がその後合併して、後35年日本甲虫学会と改称し、今日に至っているが、創立当初から大倉氏は面倒な庶務・会計を御引受け下さり、私は編集・海外との渉外を担当したが、大倉氏は50年全く変わらず、会の全責任を一身に引受け、極めて几帳面、且正確に会務の運営を行って来られたその功績とその温かい人となりに対しては何人も絶賛の言葉を惜しまないし、深い感謝の念を持つことを信じて疑わない。大倉氏自身長年月産業機械工業会に勤務、関西支部事務局長。兵庫県の購入した故阪口浩平博士のコレクションの整理をボランティアとして勤められたし、又保育社版「日本甲虫図鑑II」のオサムシ科中の8亜科と、クビボソゴミムシ科を分担執筆されたのがよい業績となっていると思う。

#### 日本甲虫学会常任幹事 石田 裕氏

前述の本年1月17日の阪神大震災に不幸にも明石市の御自宅で遭難逝去された。全く本学会にとってはその御逝去に對しおやみの言葉に苦しむ程の大損失であった。石田氏は京都大学農学部昆虫学科の御卒業、京都府立農林専門学校・西京大学(京都府立大学の前身)の徳永雅明教授の応用昆虫学研究室に助手としてプロの昆虫学者の道をすすまれた。その後兵庫農大に移られ、不幸にして片方の耳が難聴となり、神戸商大図書館に移られたと聞いている。大倉氏を助け、寄せられた全原稿を綿密に検討し、オックスフォード英語辞典等の引用文を示したりして正しい事は一步も引かぬ信念の人であった。教授の下でヒゲガガンボ科の邦産種目録をまとめられた他、日本でナガゴミムシ属 *Pterostichus* の専門家として極めて有名である。いずれにせよ、我が学会は余人を以て変え難い立派な常任幹事を一度に失った訳で、全く残念で致し方がない次第である。紙幅の関係で思いの一部も表現出来ず申し訳なく思います。

◎林 匡夫、1992。大倉正文氏と私と日本甲虫学会。昆虫学評論、47(2): 85-89。

#### ○シコクヒラタナガゴミムシの新産地

シコクヒラタナガゴミムシ *Pterostichus* (*Sphodroferonia*) *miyamai* KASAHARA et ITÔ は、地下浅層に生息する特異なナガゴミムシで、愛媛県河津、高知県鷹之巣山、奥南川山で採集された標本に基づいて1987年に記載された\*。暗赤褐色の細長い体は平たく、眼も小さく扁平で、上翅の条溝が幅広く、間室に細点刻を散布する。脚が長く、付節の上面に縦しわがあることも特徴のひとつである。

本種は、これまで四国中央部の石鎚山系の各所で採集されていたが、最近、安芸市と物部村の山地で発見され、四国南東部にも分布していることが判明したので報告しておく。

5♂♂, 1♀, 高知県安芸市神己屋山(標高830m, 地下浅層), 3. VI. 1994, 伊東善之採集。

1♂, 高知県物部村権佐古(標高1,100m), 14. V. 1995, 伊東善之採集。

いずれも基産地の個体群と比較して形態上の差異はなく、今後、四国各地で発見される可能性がある。



高知県安芸市神己屋山産♂

\* Kontyû, Tokyo, 55: 139-145.

(千葉県船橋市, 笠原須磨生; 高知市, 伊東善之)

#### 日本鞘翅学会

会費(一カ年)6,000円, 次号は1995年12月下旬発行予定

発行人 佐藤正孝

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

#### 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社